

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 59
NO. 60
平成 20 年

案内 平成 20 年度関西大会

発行 日本庭園学会 (会長 藤井英二郎)
〒 150-0041 東京都渋谷区神南 1-20-1
(有) 造園会館気付
TEL(03)-3462-2850 FAX 03-3464-8465
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>



日 程

平成 20 年 12 月 13 日 (土) 現地見学会・懇親会

14 日 (日) 研究発表会 / 公開シンポジウム

会 場

現地見学会 / 浄瑠璃寺 (京都府木津川市加茂町)

研究発表会・公開シンポジウム / 奈良文化財研究所大講堂

<交通>近鉄大和西大寺駅下車 徒歩 10 分

※各会場には直接電話連絡等をしないよう、ご協力願います。

参加費

研究発表会 / 会員 : 1,500 円 非会員 : 2,000 円

現地見学会 / 会員 : 1,000 円 非会員 : 1,500 円

公開シンポジウムのみ / 無料

※現地見学会の参加費には、拝観料・資料代が含まれています。

平成20年度 関西大会 プログラム

8
(土)

集合場所 / 浄瑠璃寺前バス停 (注 : 浄瑠璃寺道とお間違えないように願います)

集合時間 / 14:10

交通 / 近鉄奈良駅前 奈良交通バス

バス停 13 番から 13:38 発加茂駅行きが便利です。乗車 25 分 (570 円)

・見学会の時間帯 / 14:10 ~ 17:00

・懇親会の時間帯 / 18:00 ~ 20:00 会場 / 百楽 (奈良近鉄ビル 8F) 0742-24-2771

9
(日)

8:30 受付

9:00 研究発表会開始 開会の挨拶 会長 藤井英二郎

11:30 研究発表会終了

12:00 ~ 13:15 休憩 (※理事は奈良文化財研究所本館 1F 食堂にて理事会)

13:15 公開シンポジウム「再考・浄土庭園」開始

趣意説明 今江秀史 (京都市文化財保護課)

13:30 情報提供 1 「摂関家の別業都市における浄土庭園 (仮題)」

杉本宏 (宇治市歴史資料館)

14:10 情報提供 2 「平安京に依拠する院御所における浄土庭園 (仮題)」

前田義明 (京都市埋蔵文化財研究所)

14:50 休憩

15:00 情報提供 3 「独立政権を目論んだ地方貴族の地方都市における浄土庭園 (仮題)」

八重樫忠郎 (平泉町役場)

15:40 情報提供 4 「武家政権の中核地域に造られた浄土庭園 (仮題)」

大沢伸啓 (足利市教育委員会)

16:20 総括 仲隆裕 (京都造形芸術大学教授)

16:45 公開シンポジウム終了 閉会の挨拶 関西大会実行委員会 委員長 仲隆裕

公開シンポジウム概要

平安期の庭園を論ずる上で欠くことのできない潮流として、浄土庭園がある。

浄土庭園については、数多くの資料及び発掘調査の成果により、既に語りつくされた感があるが、以下のように探求できていない

点も少なくない。各所において浄土庭園観に基づく立地を選定する意志について論究できているか。平泉、足利・鎌倉、岡崎・鳥羽、宇治で展開した浄土庭園群は、なぜ群として造られるに至ったのか。また、それぞれ性格や用途は異なることから、その共通性・独自性について比較研究が出来ている

かできているか。

また、浄土庭園造りが環境を取り込んで造ることとなった動機は、浄土教や浄土曼荼羅図からだけで語ることが出来るのか。

今回のシンポジウムでは、以上の問題点に立脚して、浄土庭園群が造られた地域ごとに多角的な視点で情報提供をし、将来的な研究の可能性を探究する。 ■



奈良文化財研究所までのアクセスマップ

研究発表会 全4件

平成 20 年度関西大会の研究発表は下記の通り。

(9:00-9:30)

1. 唐代王維の輞川別業に見る景観要素について

河原 武敏

概要 本研究は盛唐の詩人王維の輞川別業庭園の構成にかかわる景区と景点を詩文から抽出し、その景観要素を地形・建築構造物・植物・季感・天象・その他から分類整理し、その特徴について考察を加え、実地調査結果を報告する。

(9:30-10:00)

2. 道元禅師の跡を尋ねて

堀澤 眞澄

概要 演者は、道元禅師が永平寺を開く前に居た越前の善峯寺から大仏寺跡を尋ねた。彼はそこが気に入り、「今日山に帰れば、雲に喜気あり、山を愛するの愛は初めより甚し」と述べている。この頃の禅宗の曹洞宗の寺は、庭などの芸術的要素は少なかった。しかし、曹洞宗伽藍建築史の権威として知られている横山秀哉氏（前東北大学助教授）によると、大仏寺跡にはそれらしき枯山水の築庭と思われるような石組み風のものが残っているという。演者は実地にここを尋ね、鎌倉時代の横三尊と座禅石を発見したので報告する。

(10:00-10:30)

3. 文京区旧磯野邸の庭園構成についての考察 (仮題)

末岡 円 (千葉大学大学院園芸学研究所)

藤井 英二郎 (千大学園芸学部)

概要 文京区湯立坂沿いにある旧磯野邸、通称銅御殿は大正元年に竣工され、銅板葺の屋根と壁面を持つ近代和風住宅で重要文化財に指定されている。北向きの起伏に富んだ主庭という特徴を持ちながら、その検討は行われていない。本研究では実地踏査と史料による考察を行う。

(10:30-11:00)

4. 擁翠園の庭

今江 秀史 (京都市文化財保護課)

概要 室町期に始まる彫金師の家系で、以降幕末まで

一七代にわたり刀剣の装飾金物の製作を生業とし、のちに大判座・分銅座の管理者となった家系に後藤家がある。その五代徳乗の弟である長乗の居宅に造られた庭が擁翠園である。現在の京都市北区と上京区にまたがる地域に位置し、そこは平安京の北の境界にあたる。大正初期に後藤家から手放された以降、数度所有権が個人に移った後、旧郵政省に譲渡された。建物は失われていたものの、同貯金事務センターに付帯する庭として存続し、限定的に一般公開がされていた為、その存在は知られていたが、詳細は不明であった。本発表では、後藤家についての概要並びに擁翠園の変遷について考察する。

(11:00-11:30)

総括

新会長の挨拶

藤井英二郎

この度、中島宏前会長の後任として会長の任を務めることとなりました。能力に過ぎた任務で躊躇いたしましたが、理事の方々をはじめ多くの会員のお力添えを得ながら大任を果たしたいと思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

思い返せば、すでに17年も前になる平成3年7月23日、本学会の設立総会が千代田区三番町の大妻女子大学で開催されました。日本庭園の研究はそれまで日本造園学会を中心に進められてきましたが、分析・考察の観点に限られていて日本庭園の多様な側面に光が当たっていないという思いが本会の設立に関わった方々にありました。このような問題意識をもとに、造園学はじめ、考古学や建築学、美学など多くの分野の方々が一緒になって日本庭園研究を進めることとなり、浅野二郎初代会長のもとに学会として発足いたしました。

「小さく産んで大きく育てる」という浅野会長の設立総会でのお言葉の通り、50数名で発足した会は着実に会員数を増やして今日に至っております。そして、学会活動の中心的な成果である学会誌も18号を数え、また学会発表や研究会活動を網羅した10周年記念論文集も刊行されました。こうした展開は、偏に歴代会長はじめ

会員全員の努力と研鑽によるもので、今後の展開に繋がる大きな蓄積であり基盤です。

10周年を機に検討が始まった『日本庭園学事典』(仮称)の編纂は引き続き大きな課題で、20周年を目的に着実に進めていく必要があります。また、本会設立の大きな目的である日本庭園の多様な実態・姿を多様な観点から研究することもより一層展開したい課題です。さらに、日本庭園と密接な関係がありまた近年様々な発掘も進んでいる韓国や中国の庭園との比較や、世界に400以上もある日本庭園の研究とその利用・管理をとおした日本庭園に対する理解の深化も大きな課題です。学会は、会員による研究の成果を広く社会に還元し、日本庭園に対する社会的関心やその意義に対する理解を深め、研究の裾野を広げることも重要です。

こうした様々な課題に取り組む学会の体制も中島前会長のもとに検討が進められ、今年度から新たな体制で活動が始まっております。会員の皆様方には論文投稿はもとより、様々な研究会や見学会に積極的にご参加いただけますようお願い申し上げます。

文末になりましたが、今期の役員が任について間もない9月6日、澤田天瑞副会長が逝去されてしまいました。先生のご功績については近刊の学会誌に掲載されることになっておりますので、ここでは先生の学恩に感謝するとともにご冥福をお祈りさせていただきます。 ■

第3回日本庭園学会賞

募集のお知らせ

日本庭園学会では、日本庭園や日本庭園に関わる研究に関する業績を顕彰するために、日本庭園学会賞を設けました。今年度は第三回の募集をおこないます。

審査の対象は、論文など学術に関すること、庭園技術や技能に関すること、庭園に関する著作等です。著作等には、映像や写真も含まれます。応募締め切りは1月15日です。なお、応募書類は返却しません。

この賞は会員ばかりでなく、会員の推薦する者も学会賞の対象者になりますので、庭園学の発展のために、自薦、他薦を含めまして、ぜひご応募のほどをお願いいたします。

募集要項

1. (目的) 日本庭園およびそれにかかわる研究に関する業績を顕彰するため。
2. (対象者) 日本庭園学会員または学会員の推薦する者。
3. (対象) 学術：庭園に関する論文で、庭園学の発展に貢献した者。
技術：庭園に関する計画・設計・施工、維持管理・運営、遺跡調査、復元整備、

修理等庭園技術および技能の発展に貢献した者。

著作等：庭園に関する著作、映像、写真等の業績が極めて優れていると認められた者

なお、他に奨励賞を設けることができる。

4. (表彰) 総会で学会長が授与し、その内容を日本庭園学会誌に公表する。
5. (応募) 授賞対象者は学会員または学会員の推薦する者とする。

推薦者は別紙に定めた「日本庭園学会賞推薦応募書」と選考に必要な資料を添えること。

応募書等の送付先 日本庭園学会事務局

〒150-0041 東京都渋谷区神南1丁目20番11号
有限会社 造園会館 事務所内

応募の締め切り 平成21年1月15日

応募に関する問い合わせ先

信州大学農学部 佐々木邦博
Tel & Fax 0265-77-1500 (直通)
E-mail ksasaki@shinshu-u.ac.jp

総務委員会に関する 事務連絡先の変更について

学会役員の変更に伴う総務委員会の事務分担の変更により、総務委員会に関する事務の連絡先が変更となりましたのでお知らせします。

また、併せて、学会専用のメールアドレスを新設致しましたのでご利用下さい。

1 連絡先

郵便の場合：〒271-8510 千葉県松戸市松戸648
千葉大学園芸学部環境植栽学研究室
藤井英二郎教授気付

電話・FAXの場合：0265-77-1500

(信州大学農学部造園学研究室 佐々木邦博教授気付)

E-mail : teiengakkai@gmail.com (新設)

2 事務内容

- ・入会、退会、名簿情報の変更の受付
- ・年会費に関するお問い合わせ
- ・学会誌などのバックナンバーの販売
- ・その他、各種お問い合わせ

(※学会誌の販売については、ファクシミリ、電子メールでのみの取扱いとなります。電話での注文はご遠慮ください。)

会務報告

平成20年度総会

(1) 総会報告

平成20年6月21日(土)に開催された平成20年度総会において、下記の議事が原案通り承認された。

- 議題1. 平成19年度会務および活動報告
- 議題2. 平成19年度会計収支決算報告及び監査報告
- 議題3. 平成20年度活動計画
- 議題4. 平成20年度会計収支予算
- 議題5. 役員改選

(2) 理事会報告

平成20年度第1回、第2回理事会において、平成20・21年度役員と委員会構成が下記のように決定された。

顧問(3名):	伊藤 鄭爾	牛川 喜幸	中村 昌生
理事(29名):	浅野 二郎	足立 佳代	栗野 隆
	市川 秀和	井上 元	今江 秀史
	大澤 伸啓	小野 健吉	加藤 元信
	河原 武敏	佐々木 邦博	澤田 天瑞
	吹田 直子	菅沼 裕	杉本 宏
	鈴木 久男	鈴木 誠	高瀬 要一
	谷川 章雄	玉井 哲雄	仲 隆裕
	中根 史郎	野村 勘治	平澤 毅
	藤井 英二郎	古谷 勝則	前田 宗正
	前田 義明	宮内 泰之	

委員会構成(*は委員長・**は副委員長)

監事(2名): 高橋 一輔 中島 宏

委員会構成(*は委員長・**は副委員長)

会長 藤井英二郎
副会長 前田宗正・澤田天瑞
関西支部長 仲 隆裕

総務委員会: 佐々木邦博*・菅沼裕・宮内泰之
学術委員会: 浅野二郎*・河原武敏・今江秀史・
佐々木邦博・鈴木誠

企画委員会: 鈴木誠*

(全国大会運営) 大澤伸啓**・玉井哲雄・古谷勝利・
三原斉・宮内泰之

(関西大会運営) 仲 隆裕**・栗野隆・菅沼裕・
杉本宏・鈴木久男

(見学会運営) 澤田天瑞**・小野健吉・加藤元信・
高瀬要一

(研究会等運営) 平澤毅**・市川秀和・井上元・
高瀬要一・谷川章雄・中根史郎・
野村勘治・前田義明

(渉外) 藤井英二郎**・金眞成・五島聖子

編集委員会: 大澤伸啓*・仲 隆裕**・足立佳代・
栗野隆

広報委員会: 仲 隆裕*・今江秀史・井上元・安野肇・
春成美奈子

将来検討委員会: 藤井英二郎*・小野健吉**・栗野隆・
今江秀史・加藤元信・菅沼裕・鈴木誠・
仲 隆裕・平澤毅・宮内泰之

20周年記念事業委員会: 浅野二郎*・河原武敏**・
(委員略)

注) 副会長 澤田天瑞氏は9月6日に逝去されました。

平成20年度 全国大会大会見学会

「旧古河庭園」によせて

栗野 隆 (奈良文化財研究所)

去る平成20年6月21日、日本庭園学会全国大会で庭園の現地見学をおこなった。その地は、第一次世界大戦の戦時貿易によって莫大な財をなした古河合名会社三

代目社長・男爵古河虎之助の本邸すなわち旧古河庭園(東京都北区西ヶ原)である。

この地はもともと陸奥宗光の屋敷であったが、宗光の



次男で古河市兵衛の養嗣子となっていた潤吉が譲り受けた。潤吉が死去して、その家督を嗣いだ虎之助の所有に帰したのは明治38年である。当初は虎之助の別邸だったようであり、後にここを本邸とする計画を立て敷地の買い足しをおこなったという。主屋洋館の設計者はよく知られているように、日本の近代建築の父といわれるジョサイア・コンドル。そして敷地の多くを占める池を中心とした和風庭園は植治こと7代目小川治兵衛の手によるものといわれている。

見学当日の午後は梅雨のさなかであったが、幸いにも午前中で雨が上がった。総勢約30名の参加者は、敷地北側に開く石造の正門前に集まった。そのまま、まずはコンドル設計の洋館から見学した。洋館の水先案内人をしてくださったのは、大谷美術館の羽田女史で、シックな服装に白い手袋をして、目鼻立ちの整ったいかにも聡明な感じのする淑女である。われわれは一階のホールに集められ、羽田女史はなめらかな口調で説明を始めた。曰くこの洋館は、古河財閥三代目社長・虎之助の本邸だったのだが、起居した期間は、大正6年から15年に至るまでの、わずか10年間であったという。その後は古河財閥の迎賓館となり、第二次世界大戦終戦後はGHQに接収された。現在は大谷美術館として管理公開されている。

洋館1階は、撞球室、サンルーム（旧喫煙室）、食堂、応接室などを見学したが、もっとも接客性の高い応接室のしつらえがみごとである。部屋がバラ園に面し、当時は「バラの間」ともよばれた応接室は、白漆喰の高い天

井が室内に溢れんばかりの明るさを与え、人の表情も鮮やかに見えるから不思議である。また、部屋の中央には精巧に細工したシャンデリアが掛けてあり、ここに灯がともると天井には雪の結晶のような模様がひろがるという。そして食堂もまた面白いものであった。食堂は1階のなかではもっとも広い部屋で、ほかの部屋と比較すると腰壁が胸ぐらいのところまで、明らかに高く造作してある。これは格式の高さを表現しつつ、音響効果も考えてのことらしい。当時は洋食で賓客をもてなしたから、さぞこんな大きな部屋で談笑するには、腰壁は胸高までは必要だったのだろう。

そして2階を見学した私たちは、ここでぶったまげた。なぜなら、2階のホールに開く扉の向うには、和室がひろがっていたからである。建物の外観からして、床の間を作り、畳を敷いた和室であろうとは、想像する余地が一寸もなかった。これには見学者一同、おお、と驚嘆の声を禁じ得なかった。とりわけすごいと思われたのはチャペル・ルームと称される部屋で、いわゆる仏間だ。壁紙は金砂子で天井は格天井とし、これもまた格式が高い。さらに15畳（客間）も格天井で、格縁はヒノキ、板はスギを用いている。特に板の木目を互い違いに組み合わせることによって市松模様になっているのが近代趣味であろうか。

洋館の内部にこのような和室を組み入れて設計したコンドルは、やはりすごい建築家であったと、ただただ感服するばかりであった。

洋館を出て、敷地の西側に設けられた馬車道を南下した見学者一同は、庭門をくぐり、崖線下に展開する庭園に入った。実はこの庭門は、元東京農大教授・



平成 20 年度 第 1 回関西研究会・海外庭園部会 公開シンポジウムによせて

仲 隆裕 (京都造形芸術大学)

平成 20 年度日本庭園学会関西研究会・第 3 部会「海外庭園部会」は、京都造形芸術大学環境デザイン学科ランドスケープデザインコースとの共催で「日本庭園の国際交流：アメリカにおける日本庭園」をテーマとして平成 20 年 6 月 7 日 (土) に開催された。まずラトガーズ大学五島聖子氏から



日本人のアメリカ移民の歴史および日本庭園作庭の系譜についてのレクチャーがあり、続いてアメリカ東海岸および西海岸に残される日本庭園の調査報告がアメリカのラトガーズ大学およびカリフォルニア大学バークレー校の学生たちによって行われた。最後にカリフォルニア大学リンダ・ジュエル氏によってアメリカにおけるモダニズム・デザインに日本庭園が与えた影響が考察された。詳細は後日「日本庭園学会誌」に掲載される予定である。以下に発表概要を示す。

発表 1：米国における日本庭園の先駆者：シオタ タケオの庭園

シオタ・タケオは米国東海岸に移民し、ニューヨークで最も古く最もよく知られているブルックリン植物園「ヒル アンド ポンド ガーデン」を造成した。彼のデザインは、伝統的な日本庭園の技法を踏襲するが、一方で新天地での試行錯誤が伺われる。ここでは、日本庭園を米国に紹介したシオタの経歴と作品、そしてその影響について紹介された。

発表 2：日本庭園のアメリカ・ランドスケープへの導入：ササキ ヒデオ

ササキ ヒデオは、30 年以上に渡ってヒデオササキ・アソシエイツを経営し、多くのランドスケープの作品を残すと同時に、17 年間ハーバード大学院デザイン学科でランドスケープの教鞭を取った。ササキはデザインにおいて環境と生態系を重視し、現在叫ばれているサステナブル・デザインの先駆者でもある。ササキはまた、

与えられた場所の地勢を生かし、アメリカで最初のコーポレート・パーク「アップジョーン アンド ジョンディア」やポケット・パーク「グリーンエーカー公園」を造った。ここでは、ササキのデザインがもたらした、米国のランドスケープに対する様々な影響が紹介された。

発表 3：ルーツを探る：米国西海岸の日本庭園研究の基礎

1854 年の日米和親条約以降、米国への日本人移民とそれに伴う日本文化の影響は右肩上がりに増大する。日本で小さな農家の労働力であった日系人一世の多くは、米国で庭師として成功をおさめた。ここでは、西海岸で最も代表的な第二次世界大戦以前に作られた二つの日本庭園「サンフランシスコ・ゴールデンゲート公園の茶庭」と「ロサンジェルス近郊のハンテントン日本庭園」が紹介され、初期のビジネス的な動機から後の日本庭園の様式の導入に至る、アメリカ人の日本庭園に対する姿勢の推移が紹介された。

発表 4：再考：日本庭園の西欧式ランドスケープへの導入

日本庭園の美意識を新天地に導入しようとしたとき、米国西海岸の庭園は本来の日本庭園とは異なった思想を持ち始める。ここでは4つの第二次世界大戦後の日本庭園、「UCLA ハナ カーター ガーデン」、「サンタ・バーバラ植物園茶庭」、「ポートランド日本庭園」がとりあげられ、これらが地元の植物や素材を用いながらどのように西海岸の環境の中で日本庭園を作り上げたかが紹介された。これらの庭園は、結果的にアメリカ人を魅惑し、日本文化に興味を持たせた。

発表5：微妙なインスピレーション：日本庭園の西海岸のモダニズムにおける影響

一般的に、トマス・チャーチやガレット・エクボ、ロ

ーレンス・ハルプリンなどに代表される米国のモダニズム・デザインと日本庭園はよく比較されるが、実際、これらのデザイナーは日本を訪れ、日本庭園を研究する以前に既に名声を博していた。しかしながら、その後継者となるリチャード・ハーグは、日本に住み（1952 - 54）日本中を旅行して日本庭園を研究した。ここでは、これらのデザイナーたちがどのように日本庭園を観察し、日本庭園がどのように彼らのランドスケープアーキテクトとしての価値観を変え、更なる成功に導いたかが紹介された。

（仲 隆裕）

平成20年度 第3回関西研究会・考庭学部会 研究会・公開シンポジウムによせて

町田 香 国際日本文化研究センター



【写真1】家原啓太氏

平成20年9月13日（土）、奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂にて、第三回日本庭園学会関西研究会ならびに公開シンポジウムが催された。公開シンポジウムは「古墳時代の庭」、研究会は「飛鳥時代の庭」をテーマに、庭園・埋蔵文化財などの多数の研究者が集い充実した研究会となった。

研究会

研究会は「飛鳥時代の庭」をテーマに四人の研究者から話題を提供していただいた。まず本研究会の本義である考庭学の趣旨が京都市文化財保護課の今江秀史氏より



【写真2】内田和伸氏

説明され、庭園に捉われず庭を広く「物事をおこなう場」として考えて行く場であることを再確認した。

次に京都市文化財保護課の家原圭太氏【写真1】から「飛鳥時代の居宅における庭」と題し話題提供をしていただいた。飛鳥時代の居宅に関しては遺構だけでなく資料的にも制約がある中で、家原氏は飛鳥・藤原地域の居宅宮殿跡の空間構造に対して、建物配置・広場（庭）・主屋域・雑舎域という分析基準を提示し、各分析基準に対して具体例をあげて内容を説明しながらその変遷を明らかにした。家原氏の考察は平城京以降の邸宅遺跡の分



【写真3】相原嘉之氏

析や、律令国家の支配体制の解明にもつながるものであった。

奈良文化財研究所の内田和伸氏【写真2】からは「藤原宮の儀式・政治空間としての庭」をテーマに話題提供をいただいた。藤原宮をはじめ飛鳥時代の都城を構成する朝堂・朝庭がどのように機能していたのか、朝参、朝礼、朝政、朝賀など実際の具体的利用を文献から示しながら、儀式・政治の場として機能していたことを詳細に説明された。

最後に明日村教育委員会の相原嘉之氏【写真3】に「飛鳥の古代庭園－苑池空間の構造と性格」と題した話題を提供していただいた。飛鳥時代の苑池となると、ようやくいわゆる庭園につながる形態が表れることから、研究会の参加者もイメージがし易い状況になってきた。相原氏は飛鳥地域の苑池の分布を示し、各遺跡を素材としながら苑池の構造分類と性格を図式化した。それによって、苑池の中でもいわゆる庭園につながる苑池は複数に分類される苑池の一つに過ぎず、苑池＝庭園の概念に示唆を与えるものであった。

そして話題提供の後は、事実確認及び討論【写真4】

が活発に行われた。

公開シンポジウム

「古墳時代の庭」を考えるシンポジウムでは【写真5】、飛鳥時代の王宮に先行する形態をもった首長居館が出現する古墳時代の庭に関して、三人の考古学研究者を招き話題提供をしていただいた。まず始めに、三重県教育委員会の穂積裕昌氏は「古墳時代の祭儀空間と庭・三城之越遺跡」というテーマのもと、考古学者の立場から「庭園史」に古墳時代遺構を位置づける試みについて城之越遺跡をケース・スタディとして行った。穂積氏は庭園史研究が当該遺構の本義を問題とせず、遊宴の要素をより評価し、後の「庭園的要素」との系譜関係の有無のみに関心を示す傾向に対して警鐘を鳴らし、日本古代文献の精査で裏づけながら城之越遺跡が祭祀空間であることを明確に述べた。さらに、古墳時代の「庭」状遺構にみる造形意図の背景を確認することができれば、庭園史の中に「古墳時代の庭」が正しく評価される可能性が見出されると示唆した。

続いて奈良県立橿原考古学研究所の青柳泰介氏は「古墳時代の儀礼空間と造り出し」と題し、庭園の護岸の形状と似通った、葺石の形状をもつ古墳の造り出しについて、多くの資料を提示しながらその類型と変遷を明確にした。古墳頂上部で不可能になった行為が造り出しで行われていった家庭を示し、また古墳における見立て行為や、首長居館・集落における特別な場所（儀礼場）に関する造形意匠・感覚が、その後日本列島の造形意識や感覚に引き継がれた可能性を推測した。

最後に、群馬県高崎市教育委員会の若狭徹氏に「古墳時代首長居館の空間構成と機能」をテーマに話題提供をしていただいた。三ツ寺I遺跡を具体例として、古墳時代の首長居館において、その構造と機能がどのようなもの

のか検討し、そこに庭の原型が認められるか否かの考察を行った。三ツ寺I遺跡の存在意義は、水辺祭祀を核とした祭儀にあり、居館やその前に広がる庭において祭儀を行うことによって首長の権威を示したと推測した。



【写真4】研究会 事実確認・討議



【写真4】シンポジウム 話題提供者（左から、穂積裕昌氏・青柳泰介氏・若狭徹氏）

庭園研究者の視点では、建物の前に広庭があれば、そこは人々が集う儀式の空間を連想しがちである。しかし、広庭があるからといって必ずしも大勢が集まる場とは限らないことを若狭氏は明示し、穂積氏の言う、庭園研究者がいかにかの後の「庭園的要素」との系譜関係に捉われていのかを実感する機会となった。

研究会、シンポジウムを通じて、例えば行為としての祭祀を系譜的に考えるのではなく、飛鳥時代で祭祀と呼んでいる空間は、古墳時代では何にあたるのか、また、飛鳥時代の見せるための儀礼の場は古墳時代にすでに準備されていたなど、飛鳥時代に先行する古墳時代存在や、両時代の連続性など、従来の庭園史では見過ごされていた重要な点が明らかになった。 ■

……………
 <研究会プログラム>

第一部 話題提供

1. 飛鳥時代の庭と考庭学の射程
京都市文化財保護課 今江秀史
2. 飛鳥時代の居宅における庭
京都市文化財保護課 家原圭太

3. 藤原宮の儀式空間としての庭
奈良文化財研究所 内田和伸
4. 飛鳥の古代庭園—苑池空間の構造と性格—
明日香村教育委員会 相原嘉之

第二部 事実確認・討議

(司会進行) 町田 香

<シンポジウムプログラム>

開催趣旨説明 栗野隆 (司会進行)

第一部 話題提供

1. 古墳時代の祭儀空間と庭・三重県城之越遺跡
三重県教育委員会 穂積裕昌
2. 古墳時代の儀礼空間と造り出し
奈良県立橿原考古学研究所 青柳泰介
3. 古墳時代首長居館の空間構成と機能—祭儀の舞台と庭—
高崎市教育委員会 若狭徹

第二部 ディスカッション「古墳時代の庭を考える」

※第4回の考庭学研究会・シンポジウムは、平成21年2月8日に、けいはんな記念公園で開催予定です。

日本の文化財保護のあり方は、岡倉天心（1863－1913）の「現状維持修理」に始まる。この考えのもとで、明治30(1897)年に公布された「古社寺保存

法」から、昭和4(1929)年の「国宝保存法」、さらに昭和25(1950)年の「文化財保護法」へと受け継がれ、多くの文化財が日本人の心のよりどころとして保存・保護・保全され、日本の芸術文化力の礎を明確に築くことが可能となったといえるであろう。

文化財保護の始めから一世紀の時代を経て、我々が対象とする文化財庭園の保全のあり方は、国際的に昭和56(1981)年の『フィレンツェ憲章』、『歴史的庭園イタリア憲章』、国内的に平成12(2000)年の「世界名園シンポジウム」の『岡山宣言』でひとつの展開をみてとれる。これらに表明された進歩性には、歴史的真实性を確保した上で、市民共有の財産としての保存活用を行い、それを都市計画の策定に組み込むといった旨であった。さらに『歴史的庭園イタリア憲章』の方では、歴史の成層を無視した一時代一様式といった修復・復元ではなく、社会と文化の反映として継続する過程を考慮した保全「生きた遺産」が特に注目された。これは、現実社会と適合する観点で大きくその進歩をみせており、現在はその過渡期の段階といえるであろう。しかし、この「生きた遺産」として実際に文化財庭園の保全を行うためには、クリアしなければならない諸問題も多い。そこで、ここでは「公」の文化財庭園の保全例として、宮崎県都城市の「都城島津邸整備活用事業」を挙げることにする。

都城市は鎌倉時代初期、源頼朝から国内最大規模の荘園「島津荘」の管理者として初代忠久が任命され、その後この「島津荘」にちなんで島津と称した島津家発祥の地である。

その都城市で明治12(1879)年に建設された都城島津邸（同市早鈴町）の土地家屋を買い取り、建物や庭園の文化財指定も考慮した保全整備計画がもちあがった。また同家は重要文化財級も含まれる約一万点の史料を寄贈し、市はそれらを展示保存する資料館も建設するために、平成19年10月から平成20年1月の間に4回の学識経験者（著者も参加）と行政各機関を中心に「都城島津邸整備活用委員会」を開催し、13億円余の総事業計画

論 説

社会に生きる「公」の文化財庭園

案としてまとめた。

しかし、その保全整備費用の巨額さと市民への説明責任が十二分でなかったことで、一度は市議会で承認されず、辛くも二

度目で承認を得ることが出来た。その後すぐに行政側は市民側とワークショップ（以下WS）を開催し意見聴取を行い、市民側から生態系保護の意見書が提出されもした。このことから理解されるように文化財の権利が「私」から「公」へと譲渡されるということは、市民の理解と協力が不可欠となる。

保全整備を進行させるには、各者間で整理すべき問題点の早期調整を行う必要が生じ、すぐにWS開催を提案し、実施した。この場合は行政側、近隣住民側、生態系保護を訴える市民側、文化財の学術側との各分野でこの文化財の保全について、違う立場から意見を出し合い、現地で直接樹木一本一本に至るまで方針を検討した。このことで文化財の保護、生態系の保護、近隣住民への危険回避、集客施設としての整備方針を具体的に定め、さらに維持管理・運営面でも理解と協力を得ることが出来た。

このように「公」の文化財庭園は、ひとつに市民に愛されなければ、その継続は難しい。これからの文化財庭園の保全を考える場合、学術的見識や伝統技術の伝承等もさることながら、市民にその文化財の価値を真に理解してもらうための協議技術の向上を考える必要があるだろう。 ■

関西 剛康（南九州大学環境造園学部造園学科准教授）



連載 庭園探訪 第7回

壬生寺庭園（京都市中京区）



【写真1】壬生寺庭園全景

壬生寺境内の変遷

壬生狂言で著名な壬生寺は、京都市の中心部にあたる中京区壬生柳ノ宮町（旧壬生村）に位置する。「壬生」という地名は、明治十四年（一八八一）～十七年に京都府が作成した『京都府地誌』によると、地域一帯が古来より湧水が多く耕作に向いていたことから「水生」と呼ばれ、後に「壬生」と記されるようになったと伝えられる。

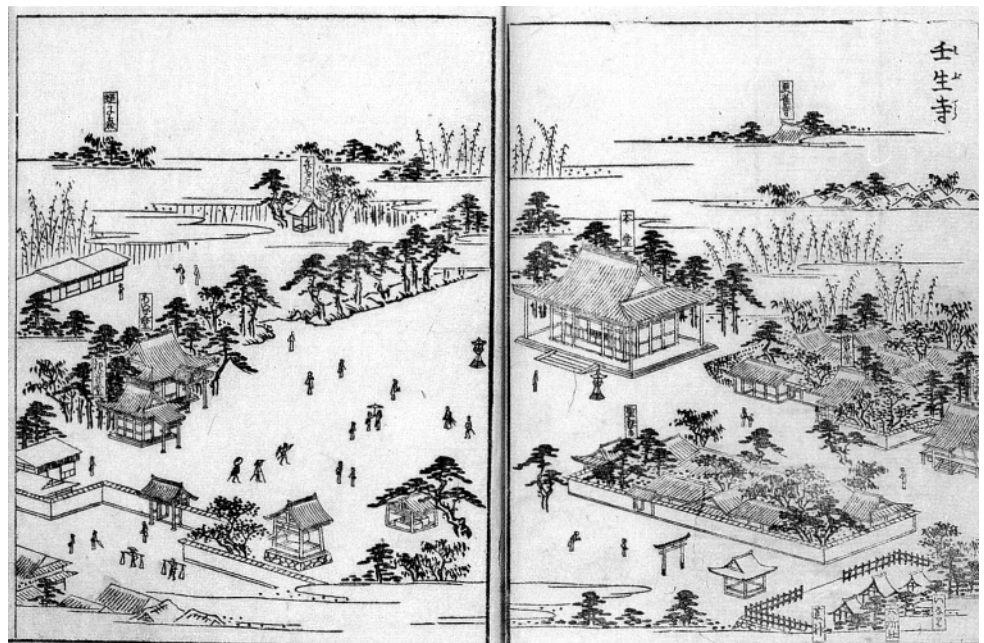
壬生寺の創建は、『壬生寺縁起』によると正暦二年（九九一）と伝えられ、壬生に寺地が定められたのは建保元年（一二一三）という。江戸期の壬生村は、壬生寺の門前を中心として栄え、豊富な湧水を活かして蔬菜の栽培が行われていた。

壬生寺の旧境内の様子は、安永九年（一七八〇）刊行の『都名所図会』【図

1】に描かれた鳥瞰図よりうかがい知ることができる。それによると、本堂に南面して広大な前庭があり、境内の正門は南面していた。また、境内には数多くの子院があり、その敷地内には樹木が植えられていたようである。これら堂塔伽藍は天明八年（一七八八）正月の天明の大火により全焼。文化八年（一八一―）に本堂は東側を正面に改められて再建、周辺も整備されましたが、昭和三七年七月（一九六三）に再び本堂が火災の憂き目に遭い、昭和四十五年（一九七〇）に再建されて今日に至る。『築山庭造伝』に描かれた壬生寺庭園

壬生寺庭園の旧状を示す資料には、江戸期の著述家である北村援琴斎（生没年不明）が著した『築山庭造伝』がある【図2】。同書には壬生寺庭園の鳥瞰図が掲載されており、「機密閑艶体、こまやかにこころをつけてしとやかに見ゆるすがた」といった一文が添えられている。

絵図をみると、現在、枯山水となっている池は水をたたえ、傍らには池に張り出して茶屋もしくは泉殿が構えられた様子が描かれており、植栽の構成も今とは異なってみる。また、『前編』は、『都名所図会』の四五年前に刊行されていることから、庭が存続していれば『都名所図会』に描写されようが、どこにも見ることができない。壬生寺の堂塔伽藍は、室町後期のあいつぐ戦乱により破壊され安土桃山期から江戸初期にかけて復興した後、天明の大火で焼失するまでの間は、被災・滅失の記



【図1】『都林泉名勝図絵会』

録がないため庭は存続していたものとみられる。また庭が寺域西端にあった「観音堂」と「あいぜん（愛染）堂」の裏側周辺という目立たない位置にあったと想定されることから描写が省略されたのではないかと考えられる。

天明の大火を経て、『築山庭造伝』に描かれた庭園の存亡を伝える資料は存在しない。しかし、現状の枯滝石組およびその周辺の形状は同書の鳥瞰図と相似しており、堂塔が焼失しても庭園の地割（骨格）だけは一定の損害を被りながら残存し後に再生した事例もあることから、現在の庭は、享保期のもを基盤として文化期の本堂再建時に改修されたものと推察される。したがって、現在の本堂裏の北角にあったと推定される茶屋とその周辺は、本堂再建に伴って部分的に失われ、併せて焼失した樹木も新たに植栽されたと考えられる。

一方、『築山庭造伝』に描写されていた水の存在はどのように考えればよいであろうか。近年の埋蔵文化財の発掘調査では、旧平安京域は湧水に恵まれた土地であり、その立地を活かして湧水を利用した園池が営まれていたことが明らかになっている。その代表例が神泉苑である。先述のように、壬生の地は湧水の豊富な地であったことから、壬生寺庭園の園池もかつては湧水によって水を得ていた可能性は高い。しかし、湧水は安定した水の供給

源ではないため、人口増による地下水位の低下等によって園池の水は失われてしまった可能性がある。

以上のように、『前編』に描写された植栽とは変化しているが、天明の大火でも大きな損傷は被らず、その後の再建時にも旧状が良好に残されたことなどに文化財価値が認められ、昭和六十一年（一九八六）六月二日に京都市指定名勝となった。

壬生寺における庭園の存在意義

壬生寺は、奈良期に平城京を中心に繁栄した南都六宗のひとつ律宗の別格本山である。京都市内にある律宗寺院は、壬生寺と子院の中院、法金剛院（京都市右京区）と子院の地蔵院の計四ヶ寺であり、法金剛院には国の特別名勝「法金剛院青女滝附五位山」がある。また、律宗の流れを組む真言律宗の寺院にある庭としては、特別名勝及び史跡浄瑠璃寺庭園（京都府木津川市）、史跡称名寺境内の庭園（神奈川県横浜市）がある。

数少ない京都市内の律宗寺院のうち二ヶ寺に庭が設けられているため、律宗には、室町から江戸期にかけて寺内に数多くの庭が営まれた禅宗のように、中心伽藍域や子院内に造り庭を設ける風潮が強かったように思われる。しかし、法金剛院や浄瑠璃寺、称名寺の庭が平安・鎌倉期の郊外に造られた別荘及び浄土の庭を前身とする

のに対して、壬生寺庭園は江戸期の京都市中に造られていることから、歴史と立地の点から同列にすることはできない。また、律宗の総本山で奈良期の建造物が現残する唐招提寺の中心伽藍域には、金堂前に公的な白州の庭はあっても池庭は存在しない。以上のことから壬生寺庭園は、旧来境内の端に位置したと想定され、茶屋もしくは泉殿が付帯していたことを勘案しても、宴遊や文芸など私的な目的のために造られたものと推察される。



【図2】『築山庭造伝』

壬生寺庭園の構成

壬生寺庭園【写真1】の指定範囲は四五六平方メートル、本堂の西側、書院の南側に位置する。現在は建造物と塀で囲まれた状態にあるが、かつて周囲はある程度開かれた状態にあったと推定される。南北に細長い枯池を中心とした造り庭で、南側半周を築山で囲まれている。築山の北東面には、枯滝石組が配されており、園池まで続いている。枯滝石組は、やや大ぶりのチャートを中心とする石で構成されており、園池の中心よりやや南方に据えられた切石の橋は、長さ4メートルに及ぶ。

植栽としては、建物周辺に刈り込まれたサツキなどの低木が配され、園池には大きくイロハモミジの枝葉が覆いかぶさるように伸張している。西側の塀沿いには目隠しを意図して常緑樹が列植されており、枯滝石組の南方築山に植えられた高生垣にはその奥に建ち並ぶ住居を遮蔽している。

園池の周りには幾つか燈籠が据えられているが、そのうち枯滝石組の中に据えられた石塔と枯池内に据えられた雪見燈籠は、明治期のものと推定される絵図の中に描かれている。なお、絵図に描かれた石塔は三重であるが、現在は一重となっている。これは、おそらく後世に破損・滅失したものと考えられる。なお、残存していた個所も経年変化により何か所でひび割れが生じていたので、平成一九年に復元修理が行われた【写真2】。(今江秀史)



【写真2】石塔（左：復元修理前、右：復元修理後）

表紙の写真

【京都市指定名勝 壬生寺庭園】

■編集後記

平成20年度総会で役員が改選され、また委員会が再編成されました。その矢先、本会創設時からのメンバーで副会長の澤田天瑞先生がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます▼澤田先生は精力的に見学会の企画・運営に取り組んでこられ、本年度の見学会開催にも意欲的であられました。急なご逝去のため見学会の開催は延期となりました。再開までご迷惑をおかけいたしますがしばらくのご猶予をお願い申し上げます▼広報委員会もメンバーが増員されて再スタートとなりました。委員会再編成のため、しばらく学会ニュースの発行が滞り、この間号外でのお知らせとなっておりますことをお詫びいたします▼本号では12月に開催される関西大会の案内を掲載しております。11月も中旬を迎えたころから京都・奈良も急速に冷え込み、木々も色づいてまいりました。紅葉の盛りは過ぎているでしょうが、ぜひ皆様のご参加をお待ちいたしております(T.N.) ■

広報スタッフの募集

広報委員会では、本紙「学会ニュース」及びホームページの作成のお手伝いをして下さる方を募集しております。「学会ニュース」及び興味があるホームページ作成に興味があるという方は、下記メールアドレスまで。
e-mail:hideimae@mail.goo.ne.jp

広報委員会事務局 今江

■学会ニュースへの投稿は下記宛にお願いします。

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付
日本庭園学会 広報委員会「学会ニュース」係
FAX(075)791-9342

編集長/仲 隆裕 編集・構成/今江 秀史

協 力/栗野隆・関西 剛康・町田香

日本庭園学会広報委員会

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付
日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342